

しばかりの役を受けて日々頑張っております。

(注) 高木氏は財団法人 全国強制抑留者協会
愛知県支部の創立以来、シベリア抑留の展示会・
シベリアの労苦を語り継ぐ集い、愛知県シベリア
死没者慰霊祭等にも積極的に参加、活動をされ、
またこの度の「愛知県シベリア抑留者祈念碑建立」
についてもご協力を頂いています。

シベリア抑留記

愛知県 奥田元三

私は大正十三（一九二四）年一月三日 父が医師をしていた開業先の静岡県島田市で生まれました。二歳になったとき本籍地である愛知県名古屋市中川区に戻り、以後現在に至っております。

昭和十八年（一九四三）徴兵検査を受け、翌年の二月に現役兵として九州の福岡市長公舎に集合し、四日後の二月二十三日博多港を出港。朝鮮の釜山から列車に乗り満州国ハイラルに着きました。そこから凍土をサクサク踏みしめて、関東軍第八国境守備隊に入隊しました。一期の検閲の後幹部候補生としての教育をチチハルで受けました。翌二十年七月に教育を終わり原隊復帰をしました。階級は見習士官で、八月十五日の終戦を迎えました。

ソ連軍の命令で八月二十日ごろ、山を下りてチ

チハルに集結することになりました。大興安嶺山中の警備隊ですから、食料はまったく残っていませんでした。私達は腹を空かせてふらふらになりながら行軍し、五日間かけてチハルの野戦病馬廠にたどり着きましたが、この五日間は餓鬼そのものでねずみや蛇を捕まえては腹に入れ、道路のタイヤ跡に溜まっている泥水を飲んでの行軍だったのです。

九月に入り、「ソ連領で三カ月働いたら日本に帰す」というソ連軍の言葉を信じ、上下二段に仕切られた貨物列車に押し込められました。私達の部隊は混成で千五百人くらいでした。シベリア鉄道のチタ駅を通過し、更に西進を続けた所はクラスノヤルスク市で、夜を待つてから収容所に入りました。

以前は監獄であつたとかで、平屋で屋内は二階になったログハウス建築のなかなか立派な物でありましたが、これが南京虫の巣窟になっていたことは一晩過ごして分かりました。

組織は始めのうちは軍隊そのままで階級章もつけていました。技術をもたない私の仕事は、もっぱら建築の方にまわされ、穴掘りばかりさせられておりました。食料は少なく、一日三〇〇グラムの黒パンと、顔が映るほど具の入っていないスープ。それで仕事はきつく辛い毎日でした。

翌年の昭和二十一年の春ごろになって、勤務中队というのが編成され、私はその小隊長になりました。与えられた任務は、ソ連の将兵たちの糧秣と浴場管理でした。お蔭で肉・野菜・バター・油などが自由に処分でき、(但し、ソ連兵の目を掠めてのこと)食べ物には不自由はしなくなりました。そのころになると、民主主義が叫ばれてきて階級章も外してしまいました。

あるとき私は小出軍医大尉殿のお供で、収容所長(大尉でいつも赤い顔をしているから赤鬼とあだ名がある)に会う。そして「私達日本人はラポータ(労働)・ラポータと追いまくられているが、食事は少ない、寒さは日本の比ではなく寒い。こ

れではノルマの達成は到底できない。せめて月に一回くらい楽しませてほしい。それには音楽がよいと思うが、やらせてはくれないか」と、図々しく申し入れました。顔に似合わず、「よし。やりなさい」と許可してくれました。

早速のこと壁新聞に、歌に自信のある者、楽器が扱える者を募集したところ、歌手が四人、バイオリン・ギター・バラライカ・ドラムなど扱える六人が集まりました。宝塚歌劇にいた兵隊を総合プロデューサーになつてもらい、また直ぐに作曲する者も現れて体制が整い、練習を重ねて第一回の音楽会を開いたところ、皆も拍手喝采喜んでくれ、赤鬼所長も楽しんでくれました。各收容所を巡回することは許可されないのです、私達のいる第五收容所に来る日を割り当てて開催しております。

そうしているうちに、歌もいいが芝居が見たいという声が高くなりました。そこでまた、赤鬼所長に申し入れると、「ウン、面白そうだな。ただし、

戦争ものや、敵討ち、それにやたらと刀を振り回すようなものは駄目だが、恋愛ものなど主体なら許可する」と一発で許可してくれました。

また壁新聞に、俳優になる者・大道具、小道具の作れる者・服や着物やカツラを作れる者など募集しました。女役も必要ということで女形（おやま）も五人集まり、裏方も含め総勢五十人体制で、劇団名も「エニセイ楽・劇団」としました。「エニセイ」とは私達のいた收容所の近くに世界でも二、三番目に入る大河エニセイ川が流れているので、川の名をとってつけました。

さあ体制は整いましたが、衣服を作る布類などの材料に困り、所長に頼み込みました。所長も「乗りかかった船」と奔走してくれ、反物・糸・針・鋏・カツラを作る馬の尾の毛など、こまごました物まで調達してきてくれました。二カ月くらいの準備と稽古の後、開演に踏み切りました。

皆が熱演したお蔭で人気は上々。赤鬼所長も自分も力を入れてきたこともあり、舞台の真ん前に

陣取つて観覧し、手を叩いて喜んでくれました。もちろん、会場は拍手喝采の嵐。あの皆が喜んでくれている光景は、今思い出しても嬉しくなりません。

楽劇団員は歌や芝居の稽古ばかりしてはおられません。仕事として与えられた糧秣や浴室の管理があります。真夜中に糧秣を積んだ貨物車が到着すると叩き起こされて、暗闇で零下五〇度以上の吹雪の中に押し出され、櫓よりを五、六人で引つ張り、駅から収容所まで四、五十分かかる道運びました。一回ならまだしも、多いときは三回ほど運搬しました。もうそうなると体のしんまで凍り付いてしまうほどの感覚になり、声も出なくなり、こんな作業も幾度となくありました。

月に一度、私達は全裸になり、ソ連軍医の前に立ちます。その軍医は女性の大隊で、傍らには看護婦も控えています。全く恥かしいとは思いません。軍医が尻の肉をつまんで、肉のつき具合を調べて健康度をチェックします。

入浴は大体十日に一度くらい。手桶一杯の湯で身体を洗います。私達はやっぱり浴槽の湯の中にとつぷりと体を浸りたい。そんな願いにどこからかドラム缶を三個調達して、ドラム缶の浴槽を作りました。浴室管理の特権ですね。その浴槽に入り目をつむって鼻歌を歌っていると、故郷が懐かしく思い出され頬に涙が流れてきます。

このドラム缶の浴槽のことを知った女医が物珍しきか「私も入る」という。三つあるが女医が入るからには残りの二つに我々は入るわけにはいかない。ドラム缶は板塀で囲つてあるから外からは見えない。好き者が一計を案じ、板塀の節を取り節穴を作つて、女医が入浴する裸体を拝見しようというのである。女医は三十歳くらいで、お世辞にも綺麗とはいえない。が、肉体は素晴らしく、おぞいた者の話でした。お気に召したかその後度々入浴に来たので、私達も交替して目を楽しませてくれました。奥さんのいる者は、特に郷愁にかられ、一日千秋の思いを抱いたことです。

団員の中で誕生日の来た者がいますと、日本人の菓子職人をしていた者に頼んで、黒パンと砂糖で饅頭を作ってもらい祝ってやりました。いつの日にか日本に帰れるか、帰してくれないのか分からぬ中での、誕生祝の饅頭を口にしながら、「来年も再来年もここで、この饅頭を何回食わなきゃならんだろうか。それとも生きて帰れんかもしれんな」その声は小さく震えていました。

昭和二十三年八月二十八日、私は舞鶴港に上陸。九月一日我が家の敷居を跨ぐことができました。

この年の十二月に名古屋市に就職。定年後、名古屋市民休暇村に勤めて五年。昭和五十九年東海学園同窓会事務局長を六十九歳まで勤めました。それ以後、民生委員・人権擁護委員などや、現在は名古屋市中川区協力委員協議会議長などに奉仕させて頂いております。

今の私の幸せを思うとき、シベリアで故郷日本を思いながら死んでいった友が、未だシベリアの凍土の下から「早く日本に帰してくれ。」と叫んで

います。一日も早く返して頂きたいと願うものです。

亡き皆様のご冥福を心から祈っております。

愛知県シベリア抑留者祈念碑が抑留経験者やご遺族の方々の協力で、今年五月立派に建立されました。御霊も海を越え、この記念碑の下に集い、安らいでおいでのことと思っております。

私は生ある限り、シベリアの抑留は片時も忘れることはないでしょう。